

# 傾聴者の意識と体験

第62回身心変容研究会@上智大学（四ッ谷） 2017年12月22日  
 宗教情報センター研究員／上智大学グリーンケア研究所客員教授  
 葛西賢太

## 今日の流れ

- 葛西自己紹介と、上智大学グリーンケア研究所について
- その訓練モデルとなるClinical Pastoral Educationについて
- 傾聴時の「身心変容」あるいは「意識と体験」
  - 他人の心を理解する脳のしくみ。ミラーニューロン、心の理論、自閉症……
  - Helper therapy principle? AAが発見した「分かち合いの潜在力」
  - 変性意識諸状態Altered States of Consciousness
  - 直観? ユングの集合的無意識。ある通訳の体験
  - 相手の心の状態を「正確」に理解することが重要なのか
  - 葛西の会話記録風サンプル
- 傾聴者の位置づけ
  - EBM/NBM
  - 傾聴の医学的効能については今回は問わない

## 葛西賢太について1

- 真言系の仏教教団・真如苑の信者であった母に連れられて寺院に通う。小学校高学年から接心修行という瞑想修行に毎月参加。
- 物事に真剣に取り組むことを教えられながらも、生来の気まぐれさ・気分変調とのあいだで揺れる思春期。人間の心理や生き方への関心。真如苑（親?）への反発と他宗教への関心。聖書やクルアーンを読む。身体の変化。
- 経済学のコースより文学部に変更、宗教学を学ぶ。東大宗教学は「教学」「神学」ではない「宗教についての客観的理解」を求められた。やせ我慢して宗教の豊かさを素直に見れなくなる悪癖? 他宗教の教学だけでなくそこに生きる人の姿からたくさんの学びを得た。自身の背景も、痛みをとまないつつ客観視するための、貴重な学びの時期。島藺進先生の存在。

## 葛西賢太について2

- 大学院で、松岡秀明、堀江宗正、高橋原らと「心理学と宗教との対話」の勉強会を継続。心理学と宗教の思想や実践に踏み込みながらそれを思想的にも社会的にも俯瞰する視点。
- 新潟の大学教員になり、そこで断酒自助会Alcoholics Anonymousのメンバーにであう。心理学と宗教の相互交渉としてAAを捉えた参与観察が博士論文になる。→『断酒がつくり出す共同性』
- 真如苑の設立した研究所「宗教情報センター」に移籍。
- 2014年より、上智大学グリーンケア研究所の人材養成プログラム「援助演習」担当教員として活動開始。
- 上記の一期生全員に、上智での学びと、各自の価値観についてインタビューを行い、まとめ中。

## 上智大学グリーンケア研究所

- 煉獄救援会の高木慶子（たかきよしこ）シスター、遺族会の傾聴
- 阪神大震災、JR西日本の脱線事故とシスターの関わり
- 聖トマス大につくられた日本グリーンケア研究所（と、2009からの傾聴者養成活動）が、上智大によって大阪で継続。2014年より東京で開講
- 2年間の「人材養成講座」臨床コースは、隔週土曜の演習・講義と毎週水曜の講義

## 「援助演習」と「集中実習」

- 受講生6人組に、スーパーバイザーが1、2名入る
- 50分程度のセッションの中で、担当者は10-15分程度の「話題」提供をする。「話題」としては、生育歴、（患者さん等への）講話、傾聴会話の記録など。担当者はこの「話題」を真摯に準備し、他の受講生も真摯に受け止め、全員で話し合う。
- 以上に加え、集中実習では病棟での患者さんやご家族への傾聴実践が加わる。この実践は、「会話記録検討」の対象となる。
- 米国のチャプレンのように、ある種の儀式を司式する場面も。Spiritual exercise leadership



1897 *Arbutus* Yearbook  
Indiana University



CPE Supervisors in Council for Clinical Training - 1932  
FR: Hilbreth (Director), Betty (Mayview), Dunbar (Director),  
Boisen (Eggs), Dodd (Boulder Island),  
BR: Gules (Field Secretary), Wise (Worcester State),  
Ryan (Superintendent)



Anton Boisen (80-years old)

人間という生きた教科書 living/written human documents  
(for theological reflection)からの学びを説いた Anton Boisen

## グリーンケア研究所の「スピリチュアルケア」

- 当初の課題としての、数多くのグリーンに対するケア
- 訓練方法としてのCPE
  - CPEのなかでのキリスト教色を減じようとして「スピリチュアル」ケア、という表現を近年自覚的に用いる
  - 仏教チャプレン、ムスリムチャプレンなどの存在
  - 日本語の「スピリチュアル」とはニュアンスが異なるのだが、誤解されがち。（「幽霊」などの「霊的」な話を持ち込むのではなく、むしろキリスト教色の後退、として「スピリチュアルケア」「スピリチュアルケア学会」はある）
- 患者、家族のみならず、医療・福祉スタッフも支援対象。

## どのような傾聴のあり方を目指すか、をめぐる、みんなの迷い

- 他者の完全理解が必要なのか？ 人という限界だらけの孤独な存在
  - 神の代弁者？ ※「赦し」あるいは「終油」「洗礼」をなす「資格」
  - 超能力者？
  - 語り手の思いが「とてもわかってしまった」「自分と似ている」と感じて、ゆすぶられる傾聴者。靈感に似せたノイズかもしれない。ロウラ自伝の「霊動辨別」。
  - むしろ、語り手は傾聴者にとって（簡単には、完全には）理解できない他者なのだ、と打ちひしがれることがだいじなのではないか。
  - ※いましめ：語り手の思いを言い当てることにより語り手を操作する、「コールドリーディング」などと呼ばれる詐欺のテクニックがある。
- よい見立ては必要（身体症状を不定愁訴と見誤らぬよう）
  - 土居健郎の歯科医 『方法としての面接』
- にもかかわらず、傾聴者の直観がなにか（あるいはなにかの欠如）を捨てる時がある。その時に、尋ねてみることもある。
  - Whyよりhow、when、what、who、where、right?…

## 傾聴者の仕事は、なにか医療的な情報を聴き出すこととは限らない

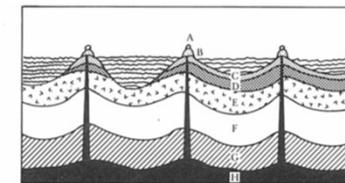
- そばにいること gift of presence/ministry of presence
  - 自助会のあり方 「言いつばなし聞きつばなし」×
  - 「まず、よく聴く」 学習の共同体
- 共感 empathy
  - 傾聴者が語り手と同じ経験を持つ場合に可能。
- interpathy
  - 傾聴者が語り手と同じものをもたない場合に、語り手に寄り添う方法。教えを請う姿勢をとおして、語り手の言語化をサポートする。

## S.フロイトが考えた、傾聴時の意識

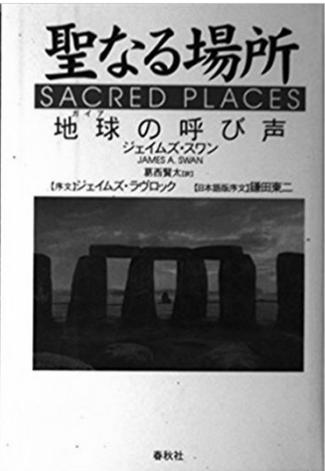
- 傾聴される側：自由連想法
  - くつろいで寝椅子に横たわり、思いついたことを話す
  - こんなくだらないことは話題にする意味がない、等という判断を捨てる
- 傾聴する側：平等に漂う注意（あまねくいきわたる細心かつ広汎な（gleichschwebende Aufmerksamkeit、evenly suspended attention）差別なく平等に漂わせる注意。
  - 特定の事柄に意識を集中しない（ノートをとらない）
  - あちらこちらへと意識が飛び回ってよい
  - 相手の無意識に、自分の無意識を受話器として差し出す

## ユングの理解：集合的無意識の地質学

- 個人を集合的無意識につなぐ原理は……



A = Individuals.  
 B = Families.  
 C = Clans.  
 D = Nations.  
 E = Large Group (European man, for example).  
 F = Primate Ancestors.  
 G = Animal Ancestors in general.  
 H = "Central Fire."  
 Figure 1. Jung's diagram of the geology of the human personality  
 (from *Analytical Psychology*, p. 133).



聖なる場所  
SACRED PLACES  
地球の呼び声  
ジェームズ・スワン  
JAMES A. SWAN  
原典著者  
【英文】ジェームズ・スワン  
【日本語訳】藤田 二

← 対象と関わる意識状態、二つの体験  
→ 言及されているネイティブアメリカンの宗教世界への敬意が、訳者の私にもたらした変化

同時通訳の意識状態

**サソリ① 同時通訳の意識状態**

同時通訳をしている知人が、その体験について語ってくれたことがある。一九九一年一月に起こった湾岸戦争は、直前にクウェートに侵襲したイラクと、アメリカ合衆国を中心とする連合国軍が闘った。彼女は、たまたまサダム・フセイン（一九三七～二〇〇六、イラク共和国元大統領）と、ジョージ・H・W・ブッシュ（一九二四～、アメリカ合衆国第四十一代大統領）それぞれの通訳をする機会を得た。

彼女は、フセインの同時通訳をするときと、ブッシュの通訳をするときには、意識状態がそっくり変わるような体験をしたと語っている。フセインの同時通訳の時の意識は、そっくりフセインに成り代わり、アメリカや連合国軍の不条理に対する怒りがじわじわと湧いてきたという。一方、ブッシュの同時通訳に切り替わった途端、彼女の胸の内は、世界の平和を守るアメリカの責任という気持ちで一杯になり、なんとしてもフセインを倒さなければという思いで、ブッシュの言葉を伝えたという。

彼女が語っている体験が、同時通訳という仕事に没入したときの意識状態を如実に語っていて、じつと興味深い。

## 共感を可能にする意識状態：瞑想？

- 下品な瞑想
  - 終末期患者が死生観を確立して死の恐れがなくなるように瞑想させる（医療スタッフが瞑想を「処方」）
  - 入所者が従順になるように瞑想させる（看守）
  - 社員が能力を120パーセント発揮できるように瞑想させる（社長は忙しいのでしない）
- 禅ホスピスプロジェクトのボランティア研修での瞑想
  - 自己認識、ケア現場での自己の現れの認識
  - 心の中の雑音を下げ、声を聞きやすくする？
- 自分自身の根底的な価値観beliefを掘り下げ、自由になる
  - 心を空っぽにして、全身を耳に
  - 相手への価値判断を手放す理想。なるべく「平等に漂」いたい現実。

## いくつかの先行研究

- エスノグラフィの実例：EKR 『死ぬ瞬間』（原著1969）
  - 末期患者の切実なメッセージ願望
  - 家族の理解したいされたいという願望
  - 傾聴を困難にする医療者、家族、スタッフの恐怖感
- 面接技法論：NBMなども含む

## 自助会Alcoholics Anonymousから、おそらくCPEが学んでいること

- 言いつばなし聞きつばなし⇒まず、よく聴く
- 同じ問題を抱えている場合、聴き手は語り手の状況を理解しやすい
  - アルコール依存症者を例にとれば、聴き手は当初話を理解できない。理解・共感する能力の回復が、依存症からの回復でもある。
- 当事者の主観的な体験の理解
  - 1939年、体験談集を出版。
  - 当事者が主観的な体験を周囲に理解される意義
  - 断酒をうながしつつもその苦しみは知らなかった周囲の人々
- Helper therapy principle